

印欧語における人称代名詞と動格性

著者	千種 眞一
雑誌名	東北大学言語学論集
号	5
ページ	19-36
発行年	1996-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129568

印欧語における人称代名詞と動格性

千種 眞一

キーワード: 非幹母音型動詞語尾, 独立動格代名詞, 補充法, 対格構造

0. はじめに

印欧諸語における人称代名詞は, その語幹形成および屈折両面での著しい多様性のために, 比較方法による祖形再建がきわめて困難な領域の一つである。その一方で, 動詞人稱語尾と人称代名詞との間には密接な関係があるとの見地から, 人稱語尾の起源を人称代名詞的要素に求めようとする試みが久しい以前から行なわれてきた。能動態二次語尾のうち少なくとも *-m と一人称代名詞との関連は一般に認められているところであり, これと同じ原理が一人称複数や二人称にも働いているものと期待される (Szemerényi 1989: 359)。こうした試みは逆に動詞語尾を手がかりにして人称代名詞の祖形を再建する試みと表裏一体の関係にあるといえることができる。また, とくに一人称代名詞がいわゆる補充法的なパラダイムを示していることから, 主語を表わす形とは異なる *me が他動詞の目的語として機能しているという事実に着目して, このような機能的分布に印欧語動格性の痕跡を見ようとする見解も近年提示された (Lehmann 1994)。小稿では, 動詞語尾に基づく代名詞の再建の可能性をさぐり, それが印欧語動格性仮説とどのように関わってくるのかを考察する。

1. 非幹母音型動詞語尾

個々の人称代名詞を扱うまえに, 動詞語尾が印欧祖語に実際どのように再建されているかを見ておこう。ここでは一般に幹母音型 (thematic) 動詞語尾よりも起源が古いとされる非幹母音型 (athematic) 動詞語尾を取り上げる⁽¹⁾。さらにいわゆる「二次」語尾は動詞語尾としてきわめて古いものであり, いわゆる「一次」語尾はこの「二次」語尾に直示的小辞 *-i 'hic et nunc' が付接された形である。たとえば印欧語動詞 *es- (= *Hes-) 「ある」のパラダイムはおおよそ次のように再建されている (cf. Szemerényi 1989: 342f.; Sihler 1995: 548ff.)。

(a) 一次語尾 (現在)

	PIE	Vedic	Gk	Lat	Hitt
1sg.	*Hés-m-i	ásmi	εἰμὶ	sum	e-eš-mi
2	*Hés-s-i	ási	εἶ, εἶς, ἐοοί	ess, es	e-eš-si

3	*Hés-t-i	ásti	ἐστί	est	e-eš-zi
1pl.	*Hs-mé(-n/s)	smás(i)	εἰμές, ἐσμέν	sumus	e-šu-we-ni
2	*Hs-té	sthá(na)	ἐστέ	estis	
3	*Hs-é/ón-t-i	sánti	εἰσί, Dor. ἐντί	sunt	a-ša-an-zi

(b) 二次語尾 (不完了)

	PIE	Vedic	Gk.	Hitt.
1sg.	*e-Hés-m	āsam	ἦα	e-šu-un
2	*e-Hés-s	ās, āsis	ἦσθα	e-eš-ta
3	*e-Hés-t	ās, āsīt	ἦν, Dor. ἦς	e-eš-ta
1pl.	*e-Hs-mé	āśma	ἦμεν, Dor. ἦμες	e-šu-u-en
2	*e-Hs-té	āsta	ἦστέ, ἦτε	e-eš-te-en
3	*e-Hs-én-t	āsan	ἦσαν, Dor. ἦν	
	*e-Hs-ér	āsur (Pf.)		e-še-ir

一見して明らかなように、この古典的な再建パラダイムでは、一人称単数・複数語尾の要素が明瞭な一致を示しているのに対して、二・三人称の単数語尾と複数語尾の間にはそのような一致が認められない。Bomhard (1993) はこうした伝統的な再建をふまえながら、非幹母音型動詞の人称語尾 (三人称を除く) の起源が、膠着的に付接された人称代名詞以外のものではあり得ないとして、次のようなパラダイムを再建した⁽²⁾。

1sg.	*Hés + me → *Hés-m	1pl.	*Hes + wé → *(H)s-wé
	*Hés + we → *Hés-w		*Hes + mé → *(H)s-mé
2sg.	*Hés + te → *Hés-t	2pl.	*Hes + té → *(H)s-té
3sg.	*Hés + se → *Hés-s	3pl.	*Hes + sé → *(H)s-sé

このモデルは、非幹母音型動詞が形成された遠い時期に、ゼロ階梯の語尾と盈度階梯の強勢語幹をもった単数形と、盈度階梯の強勢語尾とゼロ階梯の語幹をもった複数形とが対立していたという仮定に基づいている (Kerns/Schwartz 1968: 717)。このモデルから引き出される人称代名詞は *me 'I/me', *te 'you', *se 's/he', *we 'we' である。古典的パラダイムとの相違点および提案された代名詞の妥当性については以下で論じるとして、Bomhard による再建パラダイムは、人称代名詞と動詞語尾との関連をさぐるうえで有益な出発点の一つであるといつてよい。

2.1. 一人称単数

非幹母音型動詞の一人称単数語尾は *-m として確実に再建されている。Hitt. -un < *-u-m の -u- は起源がさだかではないが、Ved. perf. papráu, Lat. perf. -plēu-ī, Luw. pres. -u(-i), Toch. B -wa (-w + pret. -ā), A -we (-w-ai) にその痕跡が見られるとされ (Watkins 1969: 53), 最近になっ

ていわゆる 'Ich-deixis' の直示的小辞ではなかったかとの指摘もなされている (Markey 1979: 71; Stepanov 1989: 112-116)。Bomhard による *Hés + we → *Hés-w はアナトリア語形に基づいて仮定され得る⁽³⁾。

一人称単数代名詞は一般には語幹に主格 *egH/*egoH と対格 *me (enclitic), *mé (tonic) をもっているとされる。これらのうち *me が疑いもなく古い形であるということは、語幹 *me はあらゆる最古の印欧語代名詞に特徴的な開音節構造をもっているのに対し (*me/mo, *te/to, *se/so, *we/wo, *ne/no, *ye/yo, *kʷi/kʷo; Gamkrelidze/Ivanov [1984: 218] による語根構造タイプ VI), *egH/*egoH はより複雑な構造を示しており、方言によっても形が微妙に異なっているということから明らかであろう (cf. Gk. ἐγώ, Lat. ego, Ved. ahám, Av. azəm, Goth. ik, OCS azŭ, Hitt. ú-uk). *egH/*egoH は *me と同じ時期に形成されたのではなく、これらは最初から歴史時代におけるような補充法的パラダイムを構成していなかった可能性があることを指摘しておきたい。

印欧語が動格構造の言語であったとするならば、人称代名詞にも動格・非動格の区別が行なわれていたのではないかという仮説に基づいて、Savčenko (1984) は、一人称代名詞 *me は動詞において現在・アオリスト組織、すなわち行為動詞の標識となったゆえに、それは動格性の意味をもっていたと結論している。

他方、非動格系の代名詞は「状態」の範疇を継承する印欧語完了に求めなければならないが、印欧語完了に再建されている一人称語尾 *-Ha (= *-H₂e) に直接対応するような代名詞は見出されないので、Savčenko は上述の *-u 要素を伴う形にこれを求めて、*we を再建している。Hitt. uk の u- はこの代名詞の語根 *we/wo のゼロ階梯形であり、盈度階梯形は複数標識 *-s を付加して一人称複数代名詞 *wes に保存されたという。この *we は一人称形のみならず、2sg. acc. *t-wé (tonic), gen. *té-we (tonic) にも成分として含まれていることから (Skt. tvám, táva, Av. gen. tava, Gk. acc. σέ < *twé など)、非動格性の一般的な標識でもあるとされるが、一人称単数でこれらに対応する再建形として **m-mé (> *mé), *mé-me (Ved. máma) を認めるとすれば、*mé と *wé にどのような機能上の区別があったかを説明できない⁽⁴⁾。したがって現時点で確実に再建される一人称代名詞は *me のみであり、祖語の最古の段階ではこれと同じ形がいわゆる構造的・統辞的非動格 (strukturno-sintaksičeskij inaktiv) としても機能していたと考えられる。

この構造的・統辞的非動格という概念はもともと Gamkrelidze/Ivanov (1984: 275ff.) によって印欧語名詞組織の最古の段階に対して導入されたものであるが、その着想自体は代名詞組織にも適用可能であろう。たとえば「人」や「獣」といった語彙はともに標識 *-s/*-os をとる動格類名詞に属しているが、「人が獣を殺した」のような二価動詞を伴う文では、*-s/*-os で標示されるのは一方の項つまり動作主のみであり、他方の項つまり被動作主は、非動格性の標識 (*-om, -Ø) を伴う一次的な非動格名詞 (中性) とは別に、二次的な非動格名詞として扱われて非動格標識 *-m/*-om をとる。こうした動格類名詞の構造的・統辞的用法は格組織、とく

に *-s/*-os で標示される主格に対する対格形の形成の萌芽と見られる。一人称代名詞の表わす「私」という存在は動格的でしかあり得ないが、勿論被動作主の位置に現れることはできた。このような二価動詞を伴う文に人称代名詞が用いられた場合、たとえば「私が獣を殺した」、「獣が私を襲った」というパターンを想定してみると、動詞語尾に動格的な人称がすでに標示されていたとすれば、「私」を表わす形が同じであっても、一方は動格項、他方は非動格項として扱われ、これらのパターンのいずれにも構造上の曖昧さは起こらなかったはずである。両項が動格名詞であって、それらに動格と構造的な非動格との形態的な区別が必然的に要請されるのは異なり、代名詞の場合、少なくとも最古の段階に対しては、のちにそれぞれ主格となり対格となる形が別箇にあったと積極的に仮定する必要はないであろう。人称代名詞のこうした構造的・統辞的用法は二人称についても同様に期待される。

2.2. 二人称単数

非幹母音型動詞の二人称単数語尾として伝統的に再建されてきたのは *-s である。したがって Savčenko が主張するように、動格系代名詞としては *se が仮定されることになるが、印欧語にこのような代名詞は存在しない。実際に二人称代名詞として再建されている形は、主格 *ti/ti (または *tu/tū), 対格 *te (enclitic), *t-wé (tonic), 属格 *té-we (tonic) などであり *-s- を示さない。主格形が斜格形 *t- と歴史的に関連するにせよしないにせよ、一人称パラダイムとの平行性に鑑みて、*te が最古の代名詞であったことは疑いないであろう。また Savčenko による非動格系代名詞 *te の再建も、その痕跡が二人称完了語尾 *-t-ha (= *-tH₂e) にしか見られず、根拠としてはきわめて弱いといわざるを得ない。むしろこの語尾は、直示的小辞の類でないとするれば、二人称動格代名詞要素 *t- を含む複合形とも考えられる (Gamkrelidze/Ivanov 1984: 299)。ここで注目すべきは、ヒッタイト語で二次語尾 -t が二人称にも三人称にも区別なく現れているという事実である。この点に関して Watkins (1962: 105) は、本来二人称単数語尾は *-t であり、三人称単数語尾は *-s であった可能性を示唆している (cf. Toch. A 2sg. pālkāt, 3sg. pālkās, Hitt. 2sg. paitta, 3sg. paiš)。そして古典的印欧祖語に再建される二人称単数語尾 *-s は本来、拡張素 *-s を伴う語根がゼロ語尾の三人称単数形として動詞組織に組み込まれた古い三人称単数形であり、新しい三人称単数 *-t の侵食によって三人称単数から二人称単数へ追いやられたものであるという (cf. Szemerényi 1989: 360)。

3.1. 一人称複数

非幹母音型動詞の一人称語尾は *-me として再建されている。Gk. -μεν/-μεν は一次語尾と二次語尾の区別を示さないが、-μεν は *-me + 複数標識 *-s のほかに、*-me と語尾の一次性を表わす *-s (cf. Skt. -mas, 1du. -vas, 2. -thas, 3. -tas) が結合した形とも考えられる。ヒッタイト語では一次語尾は -weni/-meni, 二次語尾は -wen/-men である。Sturtevant (1951: 44-45) によれば、-men は -u- の前でしか起こらないが、-wen はその他のあらゆる位置で起こるので、後者が

本来の形であり、印欧諸語で一人称両数に *-w-*、一人称複数に *-m-* を示す動詞語尾の分布は二次的なものに違いないとされる。しかし、ヒッタイト語以外の印欧語はすべて **m* を示しており、Gk. *-μεν* は Hitt. *-men* に正確に対応する。*-ν* の出所はさまざまに議論されているが、パラダイムに規則的な姿を与えるために、三人称複数 **-n* からの類推により一・二人称に随意的に添加されたものと考えたい (cf. Hitt. *-wen[i]*, *-men[i]*, *-ten[i]*)。Bomhard (1993:46) は一人称の単数・両数・複数形の分布に関して、もともと **-m* は単数の語尾、**-w* は非単数の語尾であったかもしれないと指摘しているが、実際にはこれらの語尾が混合して単数にも非単数にも用いられている。したがって一人称複数語尾としては **-me/*-we* が仮定されなければならない。

一方、Savčenko (1984) は複数標識 **-s* を認めて、一人称複数動格代名詞に **mes*、非動格代名詞に **wes* を提案している。また、この **wes* はいわゆる包含形 (inclusive) であり、これに加えて排外形 (exclusive) の **nos* (cf. Lat. 1pl. *nōs*, Gath. 4du. *nā*) を仮定する。伝統的に一人称主格形として再建されているのは **wei/*wes* (Skt. *vayām*, Av. *vaēm*, Goth. *weis*, Hitt. *ú-e-eš*, Toch. B *wes*) と **mes* (OCS *my*, OPr. *mai*, Lith. *mes*, Arm. *mek'*) である。これらの相互の関係はこれまで十分に説明されてこなかったが、最近では動格性仮説に基づき、その初頭要素が二人称複数形 (cf. OCS *vy*, Lat. *vōs*; さらに一人称両数 **weH₁*: Lith. *ve-du*, OCS *vě*, Goth. *wit*) と一致しているという事実から、**wei/*wes* は包含形であり、排外形であったとされる **mes* と対立していると解釈されている (Gamkrelidze/Ivanov 1984: 291-293)⁽⁵⁾。Savčenko の提案はこのような解釈と合致せず、非動格代名詞にのみこの区別が認められている理由も明らかでない。仮定された一人称非動格形 **we* にあわせる必要があったこと、そして一人称複数斜格語幹が前倚的対格 **nos/*nōs* (Ved. *nas*, Hitt. *-na-aš*/Lat. *nōs*, Av. *nā*, OCS *ny*; 母音の長さの違いは不明) であることを考慮したためと考えられるが、なによりもギリシア語とラテン語の両方で **wei/*wes* と同源の主格形が失われているという事実を無視するわけにはいかないであろう。しかしこれらの言語には遠い時期に **mes* に由来する要素が潜在していたのかもしれない。**wei* は原始的な主格形ではなくのちの代用形であった可能性もある。Szemerényi (1989: 229-230) にしたがって、**ṛsmés* (Lesb. *ḃμμες*, Dor. *ḃμḃς*) は重複による強調形で、最初の音節が弱化した **ṛsmés* < **mes-més* に遡るとすれば、斜格の **nos/*nōs* はこの主格形に基づいて逆成された o-階梯形が一般化された形ということになる⁽⁶⁾。ゆえに複数動詞形が盈度階梯の強勢をもつ語尾によって特徴づけられていたという条件のもとでは、動詞語尾として **nos* を示す形がまったく見出されないことが容易に理解される。

動格代名詞としては単数形に複数標識を付加した **mes* および **wei/*wes* が存在していたが、**mes* が動詞語尾として優勢になるに伴い、おそらく包含形 **wei* がより独立性の高い代名詞として働いた時期を経て、さらに後代にはこれを主格として固定した言語と、**mes* を固定した言語とに分かれた。ギリシア語では主格形 **ṛsmes* があらゆる格形の基礎となり (cf. Lesb. acc. *ḃμμε*, gen. *ḃμμέων*, dat. *ḃμμι[ν]*)、**nos/*nōs* はイタリック・ケルト語派においてあらゆる格形で用いられるようになったと考えられる。

3.2. 二人称複数

非幹母音型動詞の語尾は明らかに *-te として再建されており、二人称単数語尾と同じである。しかし一般に主格形として再建されているのは *yūs (Av. yūš/yūžəm, Goth. jus, Lith. jūs; Ved. yūyám) である。斜格語幹は *u- を含む *wos/*wōs (Ved. vas/Lat. vōs, Av. vā, OCS vy) とされる。これは *nos/*nōs の場合と同様に、重複による強調形 *us-wes から逆成された o-階梯形と見ることができる。Szemerényi (1989:230) によれば, *us-més (Lesb. ὕμεις, Dor. ὕμεις, Ved. yusma-) は一人称複数 *ns-mes の影響を受けたものであるが、勿論 *uswes (Goth. izwis) < wes-wés も期待される⁽⁷⁾。さらに *yūs と *wes を直接に結びつけることは不可能であるとしながらも、*yus の us が *wes のゼロ階梯で、*y- が代名詞的要素だとする考えのあることを紹介したうえで、*wes 自体は二人称単数 *tu の規則的な複数である *twes が単純化されたものであり、このことは、*twes の語中音が単純化した動詞語尾 *-tes によって確認されるという。こうした推論によって、*-te と *us-wes は間接的に関連づけられ、一人称における *mes と *ns-mes に平行した語形成が行なわれていた可能性を見出すことができる。

以上から、*tes は同形の単数 *te に複数標識 *-s を添加した動格的代名詞であり、*yūs はこれに代わる新しい主語代名詞として選ばれた、と考えられる。us-wes は強調の重複形であったが、*yūs の出現に伴って主語としての資格を失い、その使用はもっぱら斜格形に制限されるようになった。それと同時に一人称との平行性を保つために、すでに語幹形成素としての機能を帯びていた *-me が付接されて (tonic acc. usmé, dat. usm-éy, abl. usm-ét), 本来の *wos/*wōs (enclitic) と並存したのであろう。

4. 三人称単数・複数

Watkins (1969: 52) によれば、直説法の三人称単数と命令法の二人称単数はゼロ人称の機能において形式的に同一であり、この機能的等式から、二人称単数命令法は三人称単数直説法の古い形を保存し得たのだと考えられる。たとえばゼロ語尾を伴う *es は二人称単数命令法 Hitt. eš, Lat. es に保存されている。したがって直説法三人称単数形は、Bomhard が再建するように、ゼロ語尾 (すなわち純粹語幹) および語尾 *-s (上記 2.2 参照) という二つのタイプの語尾によって特徴づけられていた。

いわゆる三「人称」は、真の人称である一・二人称とは本質的に異なるゼロ人称または非人称 (non-personne) であるという Benveniste (1966) のよく知られた定義から、主に指示代名詞がその標識としての役割を担っていたことは容易に理解される。Savčenko も三人称に対してはとくに人称代名詞を再建していない。しかしながら、三人称にこそ動格系と非動格系の区別は行なわれていたと考えなければならないであろう⁽⁸⁾。なぜなら、この人称は厳密な意味における「代」名詞として名詞の動格類にも非動格類にも言及し得るからである。

Bomhard によって再建された三人称動詞語尾 **-se* と一致する代名詞としては、いわゆる再帰代名詞 **se* が挙げられる。「主語」の形をもたないという点を除けば、この代名詞の形が二人称単数 **te-* と平行しているという事実は重要である (**s-wé* [tonic objective], **se* [enclitic]; *sé-we* [tonic gen.] など)。再帰代名詞は一般にギリシア語、ラテン語、ゲルマン語では三人称に言及するのに用いられており、**se-* はもともと単に三人称代名詞であって、一・二人称代名詞語幹の類同語幹であったと見てよいのではあるまいか⁽⁹⁾。Sihler (1995: 374) は次のように記している: “PIE *must* have had some sort of third person pronoun predating the assortment of deictics that take over that function in the daughter languages.” このような三人称代名詞の存在を想定するならば、Watkins が行なったように、三人称動詞語尾 **-s* を再建するためにとくに語根拡張素 **-s* を提案する必要もなく、一・二人称代名詞との形態的平行性も十分に保証されることになる。

上述のような三人称単数形のゼロ語尾と **-s* 語尾の区別はおそらく、関連する名詞の類別に対応していたのではないかと考えられる。すなわち **se* は語尾 **-s* に一致することから、動格類の主語に関連していた。一方、ゼロ語尾に対応する主語は非動格類の主語であった。これは中性非動格類名詞が **-om* のほかにゼロ標識によっても特徴づけられていたことに対応している。動詞パラダイムにおいては、一・二人称が明示的に標示されている以上、三人称をとくに標示する必要はなかったはずである。しかしながら、動格構造の観点から見れば、三人称代名詞の言及する名詞が動格類であるか非動格類であるかの区別は重要であり、この違いは動詞形に義務的に反映させられていたと考えることができるだろう。

上で触れたように、**se* が主語の形をもたないということには重要な意味がある。これは伝統的に **se* がすでに再帰代名詞として再建されていることと密接に関わっている。あるべきはずのところに欠如している主格単数形には、関連する名詞の動格類・非動格類すなわち通性・中性の別に応じて、直示的な指示代名詞 **so/*tod* が用いられた (Ved. *sa, sā*: *tat*; Av. *hā hō, hā*: *tat*; Gk. *ὁ, ἡ*: *τό*; Goth. *sa, so*: *þata*)。その用法が名詞の類別と直接結びついていたということが必然的に、当初から **se* の三人称代名詞の主語性をはなはだ稀薄なものにしていたと考えられるのである。最終的に主語としての地位を失ったという点では、**se* も **me*, **te* と同様であるが、後者の場合には、それに代わって独立の代名詞が登場したのに対し、前者の場合には、最初から明示的な形を用いなければならなかったという状況があった。おそかれはやかれ **se* が斜格に制限されて再帰代名詞になったのは、三人称代名詞のこうした性格に大きく依存している。それゆえに一・二人称においては、少なくとも独立の代名詞が登場するまでは維持されたであろう代名詞と語尾との語源的関係が、三人称のゼロ語尾と語尾 **-s* には十分に保たれず、その対立の構図も変更を余儀なくされるに至った。つまり動詞パラダイムにおける一・二人称と三人称との関係とは逆に、代名詞の領域では三人称にこそ明示的な形が要求されたから、そのかぎりにおいて、動詞の側に動格・非動格の別を示す二種類の語尾は必要とされなくなったのである。古典的印欧語に再建される **-t* が三人称語尾として新た

に成立したのはこの段階であったと予想される。その起源については語根拡張素、動作主名詞接尾辞などいくつかの見解が提案されてきたが、ここでは動詞語尾には代名詞的要素が含まれているとする立場から、Brugmann (1916: 593–594) が仮定したように、指示代名詞 *to- であった可能性は依然として排除できない。動格類名詞に対する *so と語尾 *-s の関係に平行して、非動格類名詞に対する *to には語尾 *-t が起こったと考えられる。そして指示代名詞 *so は斜格語幹に *to をもっていたために、一人称において斜格となった *me と語尾 *-m の間に成立した新しい関係に対応するようなかたちで、*-t が動詞組織に定着したのであろう⁽¹⁰⁾。一方で、*so 自体は *egH, *tuH のように独立した主語代名詞形としての地位を獲得したことによって、語尾 *-s との語源的関連を破棄することになった。他方で、三人称代名詞 *se はその本来の人称の意味を喪失しながら適用範囲を次第に拡げていき、スラヴ語やバルト語ではすべての人称に関連するようになった。

伝統的な再建パラダイムに見られるように、三人称複数語尾 *-en/*-er と一・二人称複数語尾の起源は明らかに異なっている。Bomhard (1993: 47) は、三人称複数語尾のモデルはもともと一・二人称複数形におけるそれと同じであったという予測に基づいて、最初の組織では三人称複数語尾は *(H)s-sé のような形であったと考えている。かりにそうであったとするならば、この語尾はきわめて早い時期に失われてしまったと考えるほかない。しかしながら、三人称単数語尾には代名詞的要素が認められるのに対し、複数語尾にはこのような要素はまったく見出せない。単数で用いられた指示詞が複数でも用いられたが、これはすべての性で *-t- であり、単数におけるような動格類・非動格類の区別を示さない。この区別は二種類の語尾 *-nt (動格) と *-r (非動格) に反映されていたのではないかとの推測がなされる所以である (cf. Gamkrelidze/Ivanov 1984: 304–305)⁽¹¹⁾。

5. 動詞語尾の拡張

動格言語とは、ある標識 A が直接目的語と非動格的自動詞の主語によって共有され、もう一つの標識 B が動格的自動詞の主語と他動詞の主語によって共有されるような格標示のパターンをもつ言語と定義される (Harris/Campbell 1995: 240–241)。たとえばトゥピ・グアラニ Tupí-Guaraní 諸語の一つトゥピナンバ語 Tupinambá における人称標識の一致の組織は次のようである (Lehmann 1944: 4)。

- | | |
|-----------------------|------------------------------------|
| (1) a-só | (3) syé nupa |
| 1SG-go 'I go, I went' | 1SG hit '(he/she/they/you) hit me' |
| (2) a-i-nupa | (4) syé katú |
| 1SG-3-hit 'I hit it' | 1SG good 'I am good' |

Lehmann は (3) と (4) の例が、印欧語における一人称代名詞の対格と一人称単数動詞の主語と

を示す *m* 標識の用法に見られる問題の解決にとくに関係があるとして、*m* を *syé* に比定し、これとは異なる標識が (1) と (2) の *a* に相当するものとして用いられていたのではないかと推測している。ここで問題となるのは、*m* が他動詞の目的語として用いられるのは容易に理解されるが、その同じ非動作主的な自動詞の標識がなぜ現在・アオリスト組織、つまり行為動詞の一人称単数を標示しているかということである。

これまで述べてきたように、印欧祖語に対しては、Savčenko が提案したような動格代名詞と非動格代名詞を別箇に再建することはできない。たしかに従来再建されてきた代名詞パラダイムにおける補充法的な語幹の使用は、印欧語に動格構造を仮定するための重要な特徴であるとみなすことも可能であろう。Lehmann (1994: 4) によれば、*m* は他動詞の目的語の標識であると同時に、非動作主的な非動格動詞の主語に対する標識でもあった。動詞組織において、前印欧語の非動格活用が印欧祖語の完了として、また動格活用が現在・アオリスト組織として継承維持されたように、代名詞標識も維持された。しかしながら、その場合でも、伝統的に対格すなわち他動詞の目的語標識として再建されている非動作主的な **m* がどうして行為動詞に遡るとされる現在・アオリスト組織の一人称単数を標示するのかという問題に直面する。ここでは非動作主的な自動詞と称されているものに、いわゆる印欧語完了は含まれていないようである。

Neu (1968: 156; 1976: 248) によって再建された動詞組織が印欧祖語の最古の段階ないし前印欧語に仮定されるとすれば、それぞれ Activum (行為動詞) と Perfectum (状態動詞) と称される二つの範疇からなるその動詞組織は実際には、いわゆる動格構造における動格動詞と非動格動詞の対立に部分的にしか一致しない。動格言語の非動格動詞には、状態を表わす動詞 (たとえば「ある」「立っている」) のほかに、状態の変化を表わす動詞 (たとえば「なる」「しぼむ」) や意思作用によらない動態的な動詞 (たとえば「閉じる」「流れる」) のような動詞も含まれるからである (Harris/Campbell 1995: 241)。そうだとすれば、Neu によって再建されたような印欧語は、非動格動詞のうち状態を表わす範疇のみをことさらに分離した、いわば変則的な動格言語と見ざるを得ない。Lehmann のいう現在・アオリスト組織は、意思的な動格動詞に加えて、非動格動詞から状態を表わす動詞を差し引いた動詞群である。このように理解するならば、本来的には非状態的非動格動詞 (自動詞) の一人称標識であった非動作主的な標識 **m* が、動格的自動詞・他動詞の語尾としても採用され、印欧語が動格構造から対格構造に移行するに伴い、それが現在・アオリスト組織における典型的な語尾として定着したのだと考えることができよう。一方、動作主的自動詞・他動詞の主語を表わすには、特別の一人称形 **egH* が選ばれたということになる。しかし、動格構造の枠組の中に位置するかぎりにおいては、**egH* と **m* はそれぞれ動格系・非動格系の主語代名詞として相補的な分布を成していたのであり、対格構造の枠組における主格および対格としての資格とは本質的に異なっていた。したがって、この二つの形は厳密な意味で補充法的な単一のパラダイムを形成していたということとはできない。そのような単一のパラダイムへの連合は、印欧語が対格構造に移行して

はじめて意味をもち得たからである。

このように、非動格系語尾が動格系語尾へ拡張したという見方は勿論不可能ではないが、幾分不自然な過程であるように思われる。動格構造においては、動格動詞が非動格動詞よりも広範な屈折パラダイムを有しているという一般的な事実、そして印欧語について言えば、現在・アオリスト組織が完了に比べて格段に豊富な屈折を示しているという事実注目すべきであろう。印欧語において動格系語尾が非動格系語尾に拡張した可能性は、Gamkrelidze/Ivanov (1984: 295) によって提示された四対の動詞語彙にも明らかに見ることができよう。それぞれ *-m(i) 系/*-Ha 系として挙げられた動詞は *es-/ *b^huH- 「存在する」、*ses-/ *k^hei- 「横たわる」、*st^haH-/ *or- 「立つ」、*es-/ *set'- 「坐る」であるが、その前項は基本的には非動格的な意味をもっている⁽¹²⁾。*-Ha 系動詞も含め、実例として引用された諸形態もすでに両系列語尾の混交を示している。印欧語の現在・アオリスト組織は、非幹母音型・幹母音型を問わず、きわめて豊富な屈折を示すのに対し、完了は孤立した欠如的な語類 (典型的には *perfecta tantum*) を成していた。現時点で再建されている印欧語動詞組織に関しては、Activum 語尾が Perfectum 語尾に影響を与えたことは想定されるが、その逆の影響は皆無ではないにせよかなり小さかったのではないかと考えられる。優勢な位置を占める動詞範疇が、劣勢な動詞範疇を犠牲にして拡張するというのが一般に認められる傾向であろう。これはヒッタイト語内部での -mi タイプ語尾と -hi タイプ語尾の影響関係についても予想されることである。たとえば複数一・二人称は明らかに -mi タイプであり、-hi 活用類の 1sg. pret. -hun は -mi タイプの語尾 -un が hi- 語尾に接合されたといった例がこれを証明している⁽¹³⁾。

6. 代名詞の機能的分布と補充法

文構造のモデルとして Stepanov (1989: 12ff.) により設定された主要文型を用いるならば、厳密な意味での人称代名詞が現れる文構造に関するかぎり、現在・アオリスト組織の動詞形が関係するのは文型 II (= 動格主語 + 動詞) と文型 III (動格主語 + 動詞 + 非動格目的語) と文型 IV (= 動格主語 + 動詞 + 動格目的語) であり、文型 I (= 非動格主語 + 動詞) は除外される。一・二人称は非動格的な関与者ではあり得ないからである。言い換えれば、人称代名詞は原理的には動格代名詞としてしか存在しなかった。代名詞を随意的な成分として含む文構造は最古の段階 I に対して次のように仮定される (V = 動詞; N = 名詞; 文型 III で直接目的語は α -語幹名詞で表わす; 文型で直接目的語は代名詞単数形のみで代表させる; 語順は考慮しない)。

段階 I

文型 II (III):	1sg. *me V-m (N-*om)	1pl. *me/*we V-mé/wé (N-*om)
	2sg. *te V-t (N-*om)	2pl. *te V-té (N-*om)
	3sg. *se V-s (N-*om)	3pl. (*toy) V-ént (N-*om)
文型 IV:	1sg. *me V-m *te/*se	1pl. *me/*we V-mé/wé *te/*se

2sg. *te	V-t	*me/*se	2pl. *te	V-té	*me/*se
3sg. *se	V-s	*me/*te	3pl. *toy	V-ént	*me/*te

この段階において人称代名詞は「主語」としての機能に限定されていない。それらは単に動格的な存在としての「我(ら)」,「汝(ら)」を表わしていたに過ぎない。人称代名詞が明示的に用いられた場合,それは主語の格ではなく,むしろすでに強調あるいは話題化のための小辞として機能している (Sihler 1995: 370)。しかしながら,最も頻繁に話題化を受けるのが主語にほかならないことも一般的な事実であろう。この最古の段階において,動詞の人称語尾は主語が話題として機能する代名詞のコピーが動詞に膠着的に添加されて生じたのだと考えられる。このような現象はタバッサラン語 Tabassaran に報告されている (Harris/Campbell 1995: 249-250)。能格言語であるダゲスタン語 (北東コーカサス語) に属する前タバッサラン語では,話題名詞の代名詞コピーを動詞に前倚的に添加することができた。他動詞 (能格) においても自動詞 (絶対格) においても主語は最も頻繁に見られる話題であり,それが動詞に複写されて,ついにこの複写は主語との一致を示す義務的標識となった。この段階は南部方言に保存されているという。

uzu gak'wler urgura-za

I.ERG firewood.ABSL burn-I.ERG

'I burn firewood.'

uzu urgura-zu

I.ABSL burn-ABSL

'I burn, am on fire.'

印欧語にこうした代名詞の複写が行なわれたと仮定すれば,ここで再建されたような一人称動格代名詞が動詞に複写されて語尾 *-m として文型 II に現れたと考えられる。しかし,動格構造から対格構造へ移行する過程の中で,大部分の方言で動格代名詞を反映する語尾 *-m が非動格的自動詞にも拡張されて,人称代名詞を成分とする文型 I の下位グループ,すなわち印欧語完了に継承された述語群を除く非状態的非動格動詞を述語とするグループは文型 II に吸収された。タバッサラン語北部方言では,上記の二つのタイプの動詞主語標識の区別が失われ,接尾辞 -za が能格とも絶対格とも一致するようになって,以下の例が示すように,一致の組織は主格・対格的となった。

izu bisnu-za žaqa

I.ERG catch-I bird.ABSL

'I caught a bird.'

izu t'irxnu-za

I.ABSL fly-I

'I flew.'

また、印欧語のこの段階には、単数と複数は語幹および語尾におけるアクセントと階梯の相補的分布によって動詞形に明瞭に区別されていた。ただし・二人称においては複数標識 *-s を付加した形に加え、重複による強調形 *nsmés, *usmés/*uswés も用いられる。主語の機能は動格的な動詞の語尾によって担われているから、裸語幹の *me, *te, *se はいわゆる構造的・統辞的非動格の資格を与えられ、文型 IV では目的語として機能している。強勢形 *mé, *twé, *swé (Gk. ἐμέ : με; σε : σε, Dor. τέ; ε, ε) も併用されるようになった。強調の複数形から逆成された *nos/nōs, *wos/*wōs も前倚的非強勢斜格語幹として多機能性を獲得している: 1sg. gen. dat. *mei/*moi; 2sg. gen. dat. *t(w)ei/*t(w)oi; 1du. RV. nau, AV. nā (gen.), Gk. νώ (nom. acc.), OCS na (acc.); 2du. RV. vām, AV. vā (acc.), OCS va (nom. acc.); 1pl. RV. nas, AV. nō (acc. dat. gen.), nā (acc), OCS ny (acc. dat.), Lat. nōs; 2pl. RV. vas, AV. vō (acc. dat. gen.), vā (acc), OCS vy (acc. dat.), Lat. vōs.

段階 II では、独立した代名詞 *egoH, ti/ti (tu/tū), *wei, yūs が新しい主語として登場し、*me, *te などが構造的・統辞的非動格から斜格の地位に移行する。原来の代名詞 *me などが段階 I において動詞語尾として確立したことによって、動格性の標示は動詞語尾に義務的に標示されることになったが、それだけ *me などは動格代名詞としての機能を弱めて、新しい独立動格代名詞の出現を促した。Schmidt (1994: 184) は、三人称単数、一人称単数・複数、二人称複数に見られる代名詞は、強勢位置における後代の主格の前段階としての動作主格 (Agens-Kasus) と、もともと非強勢/前倚的な位置にあって動作主として機能し得ない (nicht-agensfähig) 補充法的な語幹形との対立の遺物として解釈されるとして、次のように述べている: “Zur Zeit ihrer Funktion als Agens-Kasus in einem vorhistorischen Aktiv-System entsprachen die späteren Nominative *so, *egH-, *wei-, *jūs dem Typus eines aktiv samostojatel'nyj ‘unabhängiger/eigenständiger Aktiv’, um diesen Begriff in Analogie zu dem vom I. I. Meščaninov eingeführten Terminus *érgativ samostojatel'nyj* ‘unabhängiger/eigenständiger Ergativ’ zu bilden.” しかしながら、この段階ではすでに古典的動詞人称語尾の固定化が進んでいたために、これらの独立動格代名詞が出現しても、段階 I におけるような代名詞の複写現象は起こらなかったと考えられる。

段階 II

文型 II (IV): 1sg. *egoH	V-m (*te/*se)	1pl. *wei	V-mé (*te/*se)
2sg. *tuH	V-s (*me/*se)	2pl. *yūs	V-té (*me/*se)
3sg. *so/*seH₂	V-t (*me/*te)	3pl. *toy/*teH₂s	V-ént (*me/*te)

これら独立動格代名詞は文法関係としての動作主格であると同時に、強調的な話題化小辞で

もあったから、この段階で **ṣmes*, **uswes* は主語の資格およびその複数標識を失い、**nos*/**nōs* や **wos*/**wōs* とともに強勢斜格語幹として残存して、対格のほかにも与格や奪格の形成にあずかることになる: acc. **ṣmé*, **usmé*: Av. *ahma*, Ved. *asmān* < **asma-ām*, Ved. *yuṣmān* < *usma-ām* (*y-* は nom. pl. *yūyām* から); dat. **ṣméy*, **usméy*: Ved. *asmé/asmábhyam*, AV. *ahmaibhyā*, Ved. *yuṣmé/yuṣmábhyam*, AV. *yuṣmaibhyā*; abl. **ṣmēt*, **usmēt*: Ved. *asmát*, *yuṣmát*.

7. むすびにかえて

独立動格代名詞の起源が何であれ、その出現によって、かつては存在していた動詞語尾と代名詞の語源の関係が大方失われていることに注目しなければならない。これは、独立動格代名詞の出現が逆に、そうした語源的关系を動機づけていた動格性原理の一層の弱化を招く原因になったこと、したがって動格構造が対格構造に接近し、ついにはそれにとって代わられていったことを意味している。典型的に平行する現象として、カルトヴェリ語族のザン *Zan* 語派に属するミングレル語 *Mingrelian* の第二系列の格標示に起こった変化が挙げられる⁽¹⁴⁾。この言語では第一系列は共通グルジア・ザン語の格標示をそのまま保っているが、第二系列では他動詞と第三類動格自動詞の主語を標示するいわゆる *narrative* 格が第二類非動格自動詞の主語に拡張されて、その結果、この系列のあらゆる主語が同じ一つの格で標示される対格組織となった (Harris/Campbell 1995: 268–269)。この場合、第二類自動詞の主語はその標示が変化した文法関係すなわち受け手関係 (*recipient relation*) であり、他動詞と第三類動格自動詞の主語は、受け手関係により採用された標示を変化以前にすでに担っていた文法関係すなわち与え手関係 (*donor relation*) である。印欧語においては、一方で、非幹母音型動詞の人称語尾によって標示されていた与え手関係が受け手関係としての非動格的自動詞語尾に拡張され、他方で、独立動格代名詞が他動詞および動格自動詞の主語から非動格自動詞の主語にも拡張されて、その結果、**me*, **te* などは構造的・統辞的非動格の資格を脱却して完全に直接目的語としての地位を獲得するに至った。かくして、他動詞・自動詞を問わずその主語を同一に標示する主格と直接目的語を標示する対格との対立に基づく補充法的パラダイムが成立したのである。

小稿では、印欧祖語のより古い段階あるいは前印欧語に動格構造を仮定することにより、動詞語尾に基づいて人称代名詞がどのように再建され得るか、そして人称代名詞語幹における補充法の問題が従来の解釈とはどのように異なった解釈を受け得るかを考察した。動格型諸言語とその変化に関する研究はさらに、印欧語におけるさまざまな遺物的現象の理解と説明に有意義な示唆をもたらすことが期待される。

注

- (1) 小稿では印欧語完了の語尾は対象としない。完了の範疇に、主語のいかなる能動性も前提としない物理的・心理的状态の表現に用いられた特別の語彙的・文法的語類を見ようとする Perel'muter (1977: 37) は、完了が動詞組織に属するということが自体が疑問であるとして、次のような考えを表明している: “<perfekt> v kakoj-to ves'ma ot dalennyj period razvitija jazyka predstavljaj soboj osobuju neizmenjaemuju čast' reči, cvoego roda <kategoriju sostojanija>, kotoruju obedinjala s glagolom liš' obščaja sintaktičeskaja rol' — rol' skazuemogo.” (「完了」は言語発展のきわめて遠いある時期に、特別な不変化詞、一種の「状態の範疇」だったのであり、これを動詞と連合させていたのは、共通の統辞的な役割すなわち述語の役割だけであつた。) こうした見解から示唆されることは、現在・アオリスト組織の場合と異なり、完了に付接されている形態的標識が原初的には人称標識つまり代名詞ではなく、直示的な性格をもつ小辞だったのでないかということである (Stepanov 1989: 29–30)。
- (2) 印欧語動詞語尾のいわゆる膠着説は印欧語研究の当初から議論されてきたが、Katz (1988: 52) は r- 語尾の起源と印欧祖語におけるその発展を論じたのちに、印欧語の膠着性に関して次のように確認している: “...entpuppt sich das Uridg. auf dem hier besprochenen Gebiet in einer tiefen Rekonstruktion erwartungsgemäß als ganz gewöhnliche agglutinierende Sprache.”
- (3) 動詞組織の外部ではこの要素は Hitt. uk, ammug ‘me’, HLuv. (a)mu, Lyd. amu, Lyc. a/emu ‘I/me’ に保存されているかもしれない。しかしこれらはいまだ満足すべき説明がなされているわけではない。Melchert (1983) によれば、uk は *egh を継承しており、u- は二人称単数対格 *tu から借用した二次的な母音である。ammug 以下の形からは共通アナトリア語形 *emu が想定されるが、その第二音節の -u も同様に共通アナトリア語的改新と説明される。Shields (1993) は、uk はともに一人称代名詞要素である *u と *k の結合形であり、*emu は代名詞形 *em (cf. Gk. ἐμἐ) に同じ要素 *u が付加されたものと解釈する。
- (4) これと同じ要素 *-m/*-mé は一・二人称複数代名詞の斜格語幹にも付加されており、本来は代名詞的要素であったものがすでに斜格語幹形成素の様相を呈しているように見える。
- (5) 実際にはこの区別は非常に多くの言語に見られるもので、とくに動格言語に固有の現象であるとはいえない。ただし Klimov (1977:110) は、この区別が能格言語や主格言語に見られるとしても、動格言語において二人称単数ないし複数の代名詞が包含形の形成に関与するという特徴 (たとえばトゥピ語 Tupi で nde 「あなた」、ja-nde 「わたしたち」) をこれらの言語は示さないと指摘している。

- (6) Myrkin (1964: 80–81) は、トカラ語 A 一人称単数 *näs* (男性) に関して Toch. *n < I.-E. *m* を認め、この形において一人称単数主格 **me/mo* が **egh* によって置き換えられた段階がまさに証明されているという可能性は排除できないとしている (cf. Pedersen 1941: 134–135)。興味深い見解であるが、トカラ語 A は一人称単数代名詞に男性とは別に女性形をもつ点で、印欧語としては特異な言語といってよく (サンスクリットでも 2pl. acc. *yuṣmān* に対して女性への語りかけで *yuṣmās* が現れている; cf. Wackernagel 1929/30: 449, 467f.), この形に **me/mo* の主格形における唯一の反映、すなわち **mo-s* を見ることができるほど古いかどうかとも疑わしい。van Windekens (1976: 315–316) は、*näs* を斜格形 **mne-sē* ‘moi-un, moi-seul’ から派生させている (**mne* > Av. gen. *mana*, OCS *mene*; *sē* ‘un’ は Gk. *ἐγώ* の *-γ* に機能的に対応する)。
- (7) **us-wes* は **swe-* (Hitt. *šu-me-eš*, OIr. *sí* < **swēs*, Welsh *chwi*, Goth. *izwis*) としても現れている。Cohen (1982: 4) は二人称複数代名詞に **ywes/ywos* を再建し、その重複による強調変異形 **ywesywes* から **yswes* を経て Goth. *izwis* になったとし、一般には別箇の代名詞と見なされている **yūs* と **wes/wos* は単一の起源をもっていることができると指摘している。
- (8) これは、たとえば指示代名詞 **so, *sā, *tod*, 前方照応詞 **is, *ī, *id* などに見られる有生類と無生類の対立に反映されている (cf. Lat. *is, id*; Goth. *is, it-a*; Skt. *ay-ām, iy-ām, id-ām*)。
- (9) Chantraine (1961: 139) はこの語幹をギリシア語の三人称代名詞の起源と見ている。ホメロスにおいて強勢形は一般に再帰の意味をもち、非強勢形は前方照応詞の役割を果たした。Savčenko (1984: 489–490) は **se* が本来二人称の意味をもっていたとする立場から、再帰代名詞がすべての人称に関連して用いられている言語では、それが本来の人称の意味を喪失したために特定の人称の意味をもたない代名詞になったと説明している。
- (10) 伝統的に再建される二・三人称語尾 **-s, *-t* の起源の問題に関して、Lehmann (1994: 5–6) は Brugmann と同様に、**-t* を指示詞 **to-* と、**-s* を **so-* と関連させながら、二人称は有生類にしか言及しないので、**-s* はこれに制限されるようになったとし、一人称を除く人称語尾は代名詞に等価の標識ではなく、むしろ主語を動詞と関連づける直示的標識であると結論している。三人称にも **-s* が用いられていた可能性を排除していない点に加え、二人称にも直示的標識を想定していることは注目される。
- (11) Gamkrelidze/Ivanov (1984: 302–305) は、これらの語尾のそれぞれに動格類名詞派生接尾辞 **-nt-* (たとえば **(e)t’-ont^h*: Hitt. *adant-* ‘食べること, 食べる人’, Skt. *da[n]t-*, Av. *dantan-*, Gk. *ὀδών*, Arm. *atamn*, Lat. *dēns*, OIr. *dét*, Goth. *tunþus* ‘歯’; あらゆる印欧語に見られる **-nt-* 能動分詞はこの派生形に由来する) と非動格類名詞派生接尾辞 **-r* (**et’-r*: Hitt. *etri* ‘食物, 飼料’, cf. Hom. *εἶδap*, gen. *εἶδαρος*, Lith. *ėdrà* ‘飼料’) を投影させているようである。しかし、厳密にはこの **-nt-* は三人称複数語尾として再建されている **-nt-*

と異なるかもしれない。後者は *-n-t (*t は類推的に付加された新しい三人称単数語尾) であって、古い r/n- 屈折名詞接尾辞 (たとえば Hitt. watar, gen. wetenaš 「水」; ešhar, ešhanaš 「血」) がその根底にあると考えられている。Sihler (1995: 302) は, *r と *n がもともと異なる語幹の形態論的融合によってではなく、前印欧語において音韻論的分裂によって発展したであろうことを示唆するデータとして、この二つの三人称複数語尾と、語根末の *l と *n の交替を示す二つの語根、すなわち *H₂el-/H₂en- ‘other’ および *suH₂el-/suH₂en- ‘sun’ を挙げている。Katz (1988) によれば, *n は複数, *r は不定人称 (cf. ドイツ語の man 構文) の標識であった。

- (12) Gamkrelidze/Ivanov (1984: 295) は *es- 「存在する」, *ei- 「行く」, *(a)u- 「見る」 (Hitt. uhhi-), *et- 「食べる」, *ekho- 「飲む」などの動詞 (自動詞) が原来非動格であって、のちに動格系に移行したとする Bader (1976: 108) の見解を参照し, *-Ha に終る残存形が Luw. 1sg. pret. ašha などに見られる可能性を示唆している。
- (13) Hitt. 3pl. -er が *-Ha 系列に属するとすれば、これは *-mi 活用の過去にも拡張して本来の *-ant に取って代わったと考えられるが (Gamkrelidze/Ivanov 1984: 305), このような一般的な傾向に鑑みれば、-er は完了語尾というよりはむしろ Ved. aduhran 3pl. aor. ‘give milk’ などの -r- と相関する -mi タイプ語尾の反映とみなすのが穏当であろう (Sihler 1995: 466)。
- (14) ミングレル語とともにザン語派を形成するラズ語 Laz の格標示組織は、Klimov (1978) によると、動格構造との接点をまだ失っていない初期対格構造の言語として、後期印欧祖語と典型的に比定される。しかし、ラズ語における第二系列の格標示は、共通グルジア・ザン語に再建されるそれと同様に、直接目的語と第二類自動詞の主語が無標の格 (nominative) によって、また他動詞の主語と第三類自動詞の主語が有標の格 (narrative) によって行なわれるので、明らかに動格型である。ちなみにラズ語はこの標示パターンを第一系列にも拡張した。

参考文献

- Bader, F. (1976) “Le présent du verbe ‘être’ en indo-européen,” *BSL* 71 (1), 27–111.
- Benveniste, E. (1966) “Structure des relations de personne dans le verbe,” in: *Problèmes de linguistique générale*, Paris, 225–236.
- Bomhard, A. R. (1916) “Razvitie ličnych pokazatelej atematičeskich glagolov v praindo-evropejskom,” *Voprosy jazykoznanija* 1993 (2), 42–49.
- Brugmann, K. (1916) *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indo-germanischen Sprachen*, 2. Aufl. II 3/2, Strassburg.
- Chantraine, P. (1961) *Morphologie historique du grec*, 2nd ed., Paris.

- Cohen, G. L. (1982) "Reflections on Some Thorny Problems in PIE. Personal Pronouns," *Indo-germanische Forschungen* 87, 1–7.
- Gamkrelidze, T. V./Ivanov, V. V. (1984) *Indoevropskij jazyk i indoevropejcy* I, Tbilisi.
- Harris, A. C./Campbell, L. (1995) *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*, Cambridge.
- Katz, H. (1988) "Zu den 'r-Endungen' des indogermanischen Verbs," *Historische Sprachforschung* 101, 26–52.
- Kerns, J. A./Schwartz, B. (1968) "Chronology of Athematics and Thematics in Proto-Indo-European," *Language* 44, 717–719.
- Klimov, G. A. (1977) *Tipologija jazykov aktivnogo stroja*, Moskva.
- Klimov, G. A. (1978) "Obščeeindoevropskij i kartvel'skij (k tipologii padežnych sistem)," *Voprosy jazykoznanija* 1978/4, 18–22.
- Lehmann, W. P. (1994) "Person Marking in Indo-European," *Historische Sprachforschung* 107, 1–11.
- Markey, T. L. (1979) "Deixis and the *u*-Perfect," *The Journal of Indo-European Studies* 7 (1–2), 65–75.
- Melchert, C. (1983) "The Second Singular Personal Pronoun in Anatolian," *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 42, 151–165.
- Myrkin, V. Ja. (1964) "Tipologija ličnogo mestoimenija i voprosy rekonstrukcii ego v indoevropskom aspekte," *Voprosy jazykoznanija* 1964 (5), 78–86.
- Neu, E. (1968) *Das hethitische Mediopassiv und seine indogermanischen Grundlagen*, Wiesbaden.
- Neu, E. (1976) "Zur Rekonstruktion des indogermanischen Verbalsystems," in: A. Morpurgo-Davies and W. Meid (eds.), *Studies in Greek, Italic, and Indo-European Linguistics Offered to Leonard R. Palmer*, Innsbruck, 239–254.
- Pedersen, H. (1941) *Tocharisch vom Gesichtspunkt der indoeuropäischen Sprachvergleichung*, Copenhagen.
- Perel'muter, I. A. (1977) *Obščeeindoevropskij i grečeskij glagol. Vido-vremennye i zalogovye kategorii*, Leningrad.
- Savčenko, A. N. (1984) "Drevnejšie processy v oblasti ličnych mestoimenij v praindoevropskom jazyke," *Izvestija Akademija Nauk SSSR. Serija literatury i jazyka* 43 (6), 483–491.
- Schmidt, K. H. (1994) "Zum Personalpronomen und der Kategorie 'Person' im Kartvelischen und Indogermanischen," *Historische Sprachforschung* 107, 179–193.
- Shield, K. (1993) "Hittite Nom. Sg. *uk*," *Historische Sprachforschung* 106, 20–25.
- Sihler, A. L. (1995) *New Comparative Grammar of Greek and Latin*, Oxford.
- Stepanov, Ju. S. (1989) *Indoevropskoe predloženie*, Moskva.
- Sturtevant, E. H. (1951) *A Comparative Grammar of the Hittite Language*, Rev. ed., New Haven.
- Szemerényi, O. (1989) *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*, 3. Aufl., Darmstadt.

- Wackernagel, J. (1929/30) *Altindische Grammatik*, III. Nachdruck 1975, Göttingen.
- Watkins, C. (1962) *Indo-European Origins of the Celtic Verb*. I: *The Sigmatic Aorist*, Dublin.
- Watkins, C. (1969) *Indogermanische Grammatik*. Bd. III: *Formenlehre*, 1. Teil: *Geschichte der indo - germanischen Verbalflexion*, Heidelberg.
- van Windekens, A. (1976) *Le tokharien confronté avec les autres langues indo-européennes*. Vol. I: *La phonétique et le vocabulaire*, Louvain.

(東北大学文学部 助教授)